

公教育としての音楽教育の地平線

京都市立高雄中学校教諭 木下美華(院4期)

「21世紀を目前にして、今日本では多くの改革が行われようとしている。経済や政治の在り方だけでなく、学校教育も大きな変革の時期を迎えている。欧米に追いつくためのキャッチアップ型の効率主義的教育から、経済的繁栄と平和維持のために必要な世界的な視野と資質を身につけさせる創造性開発教育へと移行するために、多くの改革プランが提案されている。」と田中博之氏はそのエッセイ「21世紀の国際社会に生きる力」の中で述べている。

これは、戦後教育が果たした成果を認めつつ、そろそろシフトを変えていかねばならない時期となっているということであるつまり、21世紀の国際社会の特徴とそこで生きるために必要な資質を考える時、日本の戦後の学校教育の保守性、閉鎖性、画一性が改めて浮き彫りになってくる。

このことは、音楽科教育でも同様のことがいえる。明治以来、「洋楽」を学校教育に導入し、それなりにすばらしい成果をあげてきた。特に、戦後、学習指導要領が制定され、それによって世界的にも希に見る、全国規模に画一化された指導内容と効率的な集団学習指導が実施されてきた。このことによって、わが国の小中学生の音楽的な水準は飛躍的に伸びたことはすばらしい成果である。

しかし、その効率的な画一性は、一方では生徒と教師の関係の硬直化、さらには、生徒、教師、それぞれの思考、感覚の画一化をもたらしたことは否めない。そして、その結果として、子供のみならず、教師自身も画一化された環境の中で埋没し、個人

としてめざめるのを恐れるようになったのではないか。「音楽」というそれ自体で完結し、独立した宇宙を持つものにわれわれは幸運にも接することができるにも拘らず、硬直した中で個を埋没させていてよいものだろうか。

果たして、今回の改訂ではその点でこれからの方向が示され、それによっていよいよ教師の力量がとわれることになった。それは、われわれ音楽の教師が、どのような創造的な仕事をするのか、また、学校の中のみならず、社会全体にどのような発言をするのかということに計られていくのではないか。このことは、旧態依然とした音楽科教師であることが許されなくなってきたと考えるべきである。

これまでのように音楽科の枠組みに捕われたカリキュラムでは来るべき時代の要請に答えることはできない。より広い文化領域を視野に入れ、隣接する諸分野、また、教化内でも周辺分野を範疇に入れ、それらをそれぞれの教師、生徒、地域、の独自性と必要性によって学習が展開されていくべきである。

柔軟な思考と対応を可能にするカリキュラムの再構築と公教育に携わる音楽科教師自身の意識改革なしにしては、明治以来、連綿と続いた学校教育の中で必修音楽の果たした大きな役割を次世代に継承していけないという危機感を私は今、痛切に感じる来るべき人類総和の21世紀へ何を伝え、何を伝えてはならないか。変化させるものは何か、変化してはならないものは何かを過去の足跡からしっかりと見据え、歩み出す

一步となるものは、日々、向き合っている中学生の姿に他ならない。彼らの姿こそ私たちの勇気であり、私たちの希望である。

彼らの笑顔を出発点に私たちは勇気と自信を持って、一步を踏み出さなければならない。

以上のように考えることから、私は次のような一つの事例を提案したい。次に示す学習計画案は校内の人権学習の担当となったのを機会に、日頃、音楽の授業や学級担任として行う人権学習の授業実施の折に、考えることを授業案に纏め、昨年度3年生に実施したものである。

まだまだ、私自身勉強不足で、ねらい、授業展開共、練られていないが、方向性としては一つのものを持っているつもりである

皆様の忌憚ないご意見を伺いたい。

音楽科学習指導案

指導者 高雄中学校教諭 木下 美華

1. 日時 平成10年11月20日(金) 4限 11:25 ~ 12:20
2. 場所 京都市立高雄小学校 音楽室
3. 学年 第3学年(男子6名、女子10名 計16名)
4. 題材 日本の伝統音楽—歌舞伎「勧進帳」
5. 題材観 この題材は、第3学年のこの時期に扱うことがとても大切だと考えている。従来、伝統芸能を取り上げるとき音楽面からのみアプローチしていた。ゆえに、生徒の興味はあまり喚起されず、通りいっぺんの学習になっていた。今回、伝統芸能を創造してきた人達や、享受してきた人たちを知り、その社会を考えることにより、創造の意味や人間理解を考えるチャンスとした。そのスタンスから伝統芸能や、芸能、音楽に迫らせた。い。
6. 生徒観 女子10名は、しっかり聞き、思考を深めていくことができるが、それに比べて男子は幼い。習熟度が異なるが、それぞれに人間と自然との関わりから伝統芸能を受容し、自らの文化の根を確認させたい。
7. 指導計画
 - 第一次 日本霊異記「くさなかつた舌」を読み、不思議に思ったことを書く
 - 第二次 能、狂言等の伝統芸能発生について
 - 第三、四次 歌舞伎「勧進帳」について
8. 本時の目標
 - 日本、中世(日本霊異記の世界)の人々の精神世界を想像する
 - 芸能集団が当時の身分制度からはみ出した人たちによって構成され、その中から能、狂言などが生まれたことを知る。

9 . 本時の展開

	指導事項	学習活動	留意事項
導 入	前事の復習	* 「くさらなかった舌」を思い出す * 不思議なことが起こっていた 昔を考える	2名くらいの感想文を 読む
展 開	アニミズム について 自由な民が 生み出したもの	* 自然と人間の関わりについて * 身の回りにあるアニミズム について * 自然と（神）と人間（身分内の人） の橋渡しをする特別優れた能力 を持つ人たちの存在を知る * 田楽、猿楽から能を創造した 観阿弥世阿弥を知る * 他の芸術、文化の担い手が身分外 の人々によるものであることを 知る	「畏怖」を読む 職能集団の存在が人々 の精神安定の役をにな っていた 庭園、絵画、華道 書道、文学
ま と め	次事予告	* 歌舞伎について学習することを 知る	

10 . 評価

中世の精神世界が想像できたか

伝統の担い手となった人々の存在が理解できたか

参考資料

くさらなかった舌>

紀伊の国の熊野村（今の和歌山県新宮市の近く）に、永興禅師というえらい坊さまがおられた。この坊さまは海辺の村を歩いていて、人々に仏法を説いておられた。

禅師の行いは、いつも正しく、暮らしも質素で、欲のない人だった。とても俗人にはおよばぬ、えらい坊さまだったと、人々は尊んだあまりに、菩薩様と呼んでいた。それで、奈良の都からはるか南にいたので南菩薩と呼ばれた。

ある年の一日、ひとりの坊さまが、禅師のところへきた。持っているものといえば、法華経の一部を細かく書いた一巻の巻物と白銅の水入れと、縄を張った椅子だった。この坊さまはいつも法華経を唱えておった一年ほど、この坊さまは禅師にしたがって村を歩いておったが、やがて禅師と別れて遠くへ去ることとなった。その時坊さまは恭しく頭を下げて、椅子を与えた後で、「私はこれから、この山を越えて、伊勢の国まで（今の三重県）いきたいと思います」といった。禅師はこれを聞いて、もち米を粉にした食物を二斗（一斗は18リットル）この坊さまに与えて、信者の男二人に見送らせなされた。

三人がどんどん山道を歩いているうちに一日が暮れて夜がきた。坊さまは送ってきた二人へいった。

「遠い道のりをおくっていただきありがとうございます。私は、この先一人出歩きます。あなたたちはどうかお引取りください。途中でおなかがすくでしょうから、これをどうぞ」というて、禅師からもらったもち米粉に、法華経の一巻を添えて二人に与え、自分は麻の縄二十尋（一尋は約1.5から1.8メートル）と、白銅の水入れだけを持って

立ち去った。

二年たった。熊野村の人が、川の近くの山に入って木を切り倒して、船を造っておった。するとどこからか、山の中ほどから法華経を読む声が聞こえた。

何日かたち、何ヶ月かたち、山の中のそのお経を読む声はやまなかった。船を造っていた人は不思議に思って、山に入っていくて、その声の主を探してみた。が、わからなかった。不思議なことに声だけが聞こえてくる。

船を造っていた人は、このことを永興禅師に話した。禅師は早速その山へ入られたなるほど人の言う通り、声がした。それでその方角へいかれた。と、道の途中に白骨があった。だれかがここで死んで骸骨になったらしいが、よく見ると麻の縄で両足を縛って岩に身を投げたらしいことがわかった。永興禅師はこれを見て、気の毒な人がいるものだと思き悲しまれてから、帰ってこられた。

ところが船を造る人がまた山に入ると、その場所から法華経を読む声がした。この木こりはすぐ永興禅師のところへきて、「経を読む声がまだやみません」といった。禅師はまた山に入られて、白骨のところへきて、そのされこうべをよく見られた。と骸骨の口のところに、舌があった。死んで三年も経つのに、舌だけが生き生きとして残っているのだった。

これと似た話が、吉野の金峰山という山でも起きた。坊さまはそのされこうべを、あたりのきれいな地を選んで安置して、そのされこうべに向かい、「前世からの因縁であなたとめぐりあえました」といった。すると、されこうべの舌が動いて、その坊さまのお経に合わせていっしょに読み始めた珍しい話だと、世間の人らはいうた。